

ベルグソンにおける心身の問題

滝 浦 静 雄

The Mind-Body Problem in Bergson

SHIZUO TAKIURA

1. 序

ベルグソンの哲学は、意識を意識に直接与えられたものとして考察することから始まる。仮りに意識が脳実質の分子運動の感覚への翻訳であるとしても、まさにそのこと自身、意識されているものは脳の分子運動そのものではないことを意味するであろう (DI. 24)。我々に直接経験されるがままの意識は、彼の云う純粹持続 *durée pure* でなければならない、というところに『意識の直接所与についてのエッセ』の根本の立場がある。

しかしそれにしても、意識は我々において何故始めから純粹持続として捉えられずに、いわば空間的に疎外されるのか、という問題は残るであろう。例えば我々はよく意識の諸状態に強度 *intensité* というような量的規定を適用するが、それはベルグソンによれば、意識を空間の拡がりとの類比によって考えられるからである。すなわち意識の空間化なのである。だがそうだとすると、このことが何故起るのかという問題は、『エッセ』ではその当面の目標上表だっただけは論じられず、後の『物質と記憶』を待たねばならなかった。つまり、意識を純粹持続と規定してみても、人間が身体を持つ以上、物質との関係が問われねばならなくなるであろう。強度の概念も実は、間違った概念 *notion fausse* というよりも (EP. 1. 156)、物質と意識あるいは量と質との中間概念なのであり (DI. 54)、したがって人間が身体を持つことに基いている。そのような身体的存在としての人間が、まさに『物質と記憶』の主題にほかならない。

ところで『物質と記憶』においては、精神は何よりも記憶として捉えられる。それは一方では、当時の精神医学の状況によっているであろう。すなわち、精神の一定機能を大脳の特定部位に対応させようとする局在論は、この頃、記憶——特に言語の記憶——において一応の成功を収めることが出来た。Broca (1861) に始まる失語症の研究がそれである。したがってベルグソンは、記憶において始めて、心身関係という形而上学の大問題が観察の領域に移されるのを見たのである。けれども他方、単に我々の心的作用が大脳を介して起るといっただけならば、特に記憶を引き合いに出すまでもないであろう。しかし、過去から現在に至る時間の経過を含み、その意味で持続の名に価する作用としては、記憶しかない。したがって記憶こそは、一方大脳と係りながら、他方純粹持続であるものとして、まさに「精神と物質の交叉点」をなし

引用略号表

DI.—Essai sur les données immédiates de la conscience. 68版 1948.
MM.—Matière et mémoire. 54版 1953.
EC.—L'Évolution créatrice. 80版 1957.
ES.—L'Énergie spirituelle 52版 1948.

MR.—Les deux sources de la morale et de la religion. 88版 1958.

PM.—La pensée et le mouvant. 27版 1950.

EP.—Ecrits et paroles. I. II. III卷 1版 1957
何れも P.U.F. の版による。

(MM. 5), 精神と物質の両概念を含む人間の考察には最も適わしい視点と考えられたのである。

そこで『物質と記憶』におけるベルグソンの課題は次の二つになるであろう。(1) まず記憶こそが持続の名に価することが証明されねばならない。逆に云えば、他の心的作用は持続には係わらないことが示されねばならない。そこでベルグソンは知覚をとりあげる。それは彼によれば、行為ないし運動の在り方であって、純粹な意味では意識ではないとされる。(2) 他方、大脳局在論や、ひいては心身平行論一般の批判的検討がなされねばならない。なぜなら、意識が物質から区別されて特に純粹持続と規定されるときには、物質は非時間的であることが合せ意味されているであろう。とすれば、記憶と大脳とは原理的に何らかの食い違いを持っていないからである。記憶があくまでも持続に基き、また大脳が物質であるとするれば、そこには少なくとも完全な対応は見出せないはずであろう。しかし、だからと云って記憶が全く大脳と係わりを持たないとも云えない。なぜなら、その場合には人間は精神と身体とに分解してしまうであろうから。したがってここでは必要なのは、むしろ新しい心身関係の確立なのである。

この第(2)の点は、特に注意さるべきであろう。ベルグソンが『エッセ』で、意識を脳細胞の振動の感覚への翻訳としてみても、それは意識の本質には係わりないとして、平行論を問題にしなかったことはすでに冒頭で触れた通りであり、そして従来強調されて来たのはベルグソンのこの面であった。けれども以後彼は決してそのようなには云わない。それどころか、大脳活動という基体がなければ思惟活動もありえないと云い(EP. I. 163)、また心身の対応は、実は科学者ばかりでなく哲学者たちによってさえ最も普通に承認されていることだとも述べている(MM. 4)。したがってこの対応関係は、少なくとも科学者たちの方法的仮説とされたとしても何の不思議もないものなのである。だから我々は次のように云うベルグソンを見逃してはならないであろう。「イエスカノーかは哲学においては不毛であります。興味あり、ためになり、稔り豊か fécond なのは、どの程度においてかということです。精神と物質という二つの概念が互いに外的だということを確認めたとて何になりましょう。それに反して二つの概念が共通の国境で互いに触れ合っている所に位置してその接触の形と性質とを研究しますなら、重要な発見をすることになりましょう」(EP. I. 144)。

ベルグソンは心身間の対応を認めないのではない。ただしその対応 *correspondance* が、局在論的平行関係を意味するかどうかが問題なのである。それは彼によれば、一つの他による絶対的決定でもなければ非決定でもなく、産出 *production* でも並存 *concomitance* でもなく、ましてや厳密な平行 *parallélisme rigoureux* ではなく、既成のいかなる概念もそのままでは通用されない「或る比類のない *sui generis* 関係」であるという(EP. I. 147)。我々はそのような関係を問題にしてみたいと思う。

2. 脳 と 知 覚

ベルグソンによれば、心身平行論も随伴現象論 *épiphénoménisme* も次のように考える点では一致している。「すべての意識状態は脳実質 *substance cérébrale* の分子・原子の或る振動に対応し、感覚の強度はこれらの分子運動の振幅・錯綜・拡がりに比例している」(DI. 5)。だから「脳の内部に入り込んで、大脳実質を形成している原子の転変を親しく見るができるならば……対応する意識に起ることの詳細をすべて知るはずだ」(MM. 4)。要するに、或る脳の状態が立てられれば、一定の心理状態が結果するに違いないというのである(ES. 191)。し

かし単にこの限りでは、心身の事実的な対応以外は何も主張されてはいない、とも云えるかも知れない。けれどもそこから更に進んで「(神経系の) 求心運動は……外界の表象を生ぜしめる *faire naître*」と云われるならば (MM. 4), 対応の実質的意味は産出であることになる。そして恐らく上記のような大脳局在論が、その最も決定的な理由とされるであろう。局在論がこの頃、まず記憶について主張されたことはすでに触れた通りである。失語症における連合主義を代表する Wernicke の次の言葉には、そのような事情の一切がこめられていると思われる。「意識は……大脳回転に沈積 *déposé* した全記憶心像の総和に等しい……」。¹⁾ だがベルグソンにとっては心身間の何らかの関連が直ちに以上のように解されるとすれば、それは全く独断によるにすぎない。平行論が「形而上学的仮説」ではなくて真に「科学的規則」であるためには (ES. 192), (1) 厳密な平行と云えるまでの対応が現実には確かめられるかどうか、(2) それが確かめられたとしても、その対応は直ちに産出ないし貯蔵を意味するかどうか、の批判が必要であった。

いったい平行という概念は、本来は極めて消極的な概念のはずであろう。スピノザやライプニッツの平行論は措くとしても、例えばベルグソンとはほぼ同時代のイギリスの神経学者 John Hughlings Jackson は、平行論の立場に立ちながらも、くりかえし次のように述べている。「我々は、心的諸状態が大脳 (最高中枢) の機能 *functions* であるとは云わずに、単にそれらが脳内の働いている間に起ると云うだけだ」。²⁾ 平行論は彼にとって、意識の諸状態と神経の状態が同時に生起することを意味するにすぎず、それ以上の何物も主張するものではない。したがって彼は、失語症において大脳の損傷部位が一定しているからといっても言葉そのものが其処に局在することにはならぬとして、損傷の局在と言語の局在とを明確に区別している。³⁾ しかし同様の見解は、現代においても珍しいものではない。例えば H. Piéron は次のように考えている。一般に気力喪失や無感情、また抑制の減退など、種々の性格の異状 *disorder* が前頭葉領域の損傷によく見られるとしても、しかしそのことは、道徳感情や意志や高次の情操が其処に局在することを意味するのではなく、単に感情生活が前頭葉のシナプスの介入を必要とすることを意味するのみである、と。⁴⁾ すでに Monakow et Mourgue が、時間的な過程を含む精神の障害を全て空間的に局在せしめようとするのは、原理的に矛盾であると云っているのを見ても、静的な局在論が今日でもそのままに認められているとは思われない。⁵⁾ Piéron も局在論における *dynamism* ということを云っている。⁶⁾ 実際、頸動脈洞の圧迫によって容易に意識が失われるとしても意識がその部分に存在していることにはならぬように、⁷⁾ 脳の電気的刺戟によって意識に対応する部位を決定するという現代の実証的方法も、単に「意識に関係の深い場所」の知識を外延的に拡張するだけのことであって、⁸⁾ それが極端に云ってラジオのス

1) Wernicke: „Ueber das Bewusstsein”
Mourgue: *Le point de vue neuro-biologique dans l'œuvre de M. Bergson.*
(*Revue de métaphysique et de morale* 1920 p. 27) の引用による。
2) “Remarks on evolution and dissolution”.
(*Selected Writings of J.H. Jackson.* vol. 2 p. 84)
3) “On the nature of the duality of the brain”. (op. cit. pp. 129-30.)

4) H. Piéron: “Thought and brain.” translated by Ogden pp. 48-9.

5) Monakow et Mourgue: “Introduction à l'étude de la neurologie et de la psychopathologie.” p. 20, 168.

6) H. Piéron: op. cit. p. 45, 120 etc.

7) 本川弘一「意識について」(『中枢神経系研究の方法論』p. 85)

8) 本川弘一: 同書 p. 7.

イッチと音との間の対応以上のものを示しうるかどうかは、⁹⁾ 充分問われていいことであろう。何れにもせよ、意識と大脳の一定部位が果して一対一の対応をするかどうか、また対応するとすればその対応の意味は何か、これが J. H. Jackson と並んでベルグソンの提出した根本の問題であった。上記 Monakow et Mourgue の diaschisis の概念は、明らかにそのような Jackson およびベルグソンの影響によるものである。それでは、脳はベルグソンにおいてどのように考えられているのであろうか。

ベルグソンの立場は、神経生理学の原理を恐らくは神経生理学以上に徹底せしめるところにある。¹⁰⁾ ということは、脳をあくまでも運動の観点から見ることを意味する。

言うまでもなく神経生理学においては、脳は髄 moelle や諸神経と並んで神経系構成の一要素であろう (ES. 8)。「樹状突起」(MM. 26) や「軸索突起」(MM. 124) 等の諸突起を介して互いに非連続的に (MM. 102)、また多様な仕方では連なる神経要素 éléments nerveux もしくはノイロンの連鎖である (EC. 127)。そして神経系の本質的機能は、物体の振動 ébranlements を刺戟として受容し、それを反応として返してやるところの興奮の伝導体 conducteurs (MM. 43. 193) もしくは「運動の通路」である点にある (MM. 77)。したがって、もし脳がその一要素であるとするなら、脳は反射運動の中枢である脊髄系と本質上何の違いもないはずでなければならぬ。同じ運動が脳を経由したからといって、運動そのものに何か全く新しい要素が付加される筈はないであろう (MM. 25)。ベルグソンにしてみれば、神経生理学で「興奮の伝達」と「表象」という二つのことが云われるのは、それは自己の立場に不徹底であるか、あるいは他の立場を混入しているかである。そこでは興奮の伝達は、表象の背後のかくれた実在として、いわば実在論の立場で云われているであろう。とすれば、大脳に外界の表象を詰め込むのは、一方では大脳を表象とは全く異なる実在としておきながら、他方では外界を突然表象とみなすという、実在論から観念論への無意識の移行が行われているからなのである (ES. 196~203)。

また外界をも脳と同じ実在とするならば、もはやいかなる意味でも表象を云うことはできず、そのときの表象はギリシヤ劇の deus ex machina にすぎないものとなろう。もし神経を興奮の伝導体であるとするならば、その立場を貫かねばならぬ。そのとき脳は何よりも「行為」の器官であって、いわゆる意識や表象の装置でも記憶の倉庫でもないことになる。神経の何処を探しても伝導体以外は見当らない以上 (MM. 193)、「神経そのものは感ずるものではない」はずだとベルグソンは云っている (MM. 61)。

この一見奇異な主張は、少なくとも問題の喚起とはなりうるであろう。今日でも、ノイロン自身は単独ではいかなる心理的能力も持たないと云われている。¹¹⁾ したがって、大脳自身を手術しても (皮質それ自身の刺戟によっては) 痛覚は感ぜられないという。¹²⁾ そこで意識は大脳全体の統合的な活動 intégration によるものとされるのであろうが、¹³⁾ しかしそれ自身では心理学的能力を持たないノイロンが単に統合によってその能力を得て来るというのは、意識について

9) 秋元波留夫「意識の神経機構」に対する佐野謙助氏の発言による。(『中枢神経系研究の方法論』p. 47)

10) Mourgue は、生物学的立場、あるいは神経一生物学的立場という表現を用いている。彼によれば、このような立場をフランスで最初に採用したのが、ベルグソンであるという。

(Le point de vue neuro-biologique…… p. 64. etc.)

11) P. Chauchard: Précis de biologie humaine. p. 215.

12) P. Chauchard: ibid. p. 222, 283.

13) P. Chauchard: ibid. p. 249.

どれほどの説明でありうるのであろうか。また何処か特定の部分、例えば間脳および中脳を含む皮質下領域を中心にして、それと皮質全体との機能的統合が云われる場合でも、¹⁴⁾ 問題としては依然同じことが立てられうるであろう。

だがそれにしても、我々には脳は意識の器官と思われ、その証拠として行為の選択を挙げたく思うであろう。しかし選択について云うなら、それはノイロンの連がり方の問題として、神経生理学の云うシナプス synapse の問題として扱うことが出来、¹⁵⁾ 必ずしも意識を介入させる必要はない。「(求心運動の終末分枝とローランド講の運動細胞の間に) 介在する細胞の数が増せば増すほど、またこの細胞が出しているアミーバ様突起の数が多ければ多いほど、それらは恐らく互いに種々の仕方て接しうるのであるから、未梢から来た同一の振動に対して開かれうる道もまた益々多数にまた多様になる。したがって同一の刺戟が選択すべき運動系の数も多くなる」(MM. 26)。つまり、神経要素の非連続性と多数性とによってそれら相互の種々の接し方が可能になり、そこから、印象と対応する運動との可能的連絡の数も無限になる、というのである。少なくとも選択の可能性については、このように説明されている (cf. MM. 102, EC. 127etc)。

またベルグソンは好んでノイロン連鎖の「非連続性」を云う。それは明らかに、『エッセ』で強調された感覚の変化の非連続性に対応するものである。『エッセ』においては、感覚は非連続的・質的にしか変化しないものであって、感覚の強度 (=興奮量) の増大と見えるものは実は興奮に与かる身体の部分の増加であり、同一部分の興奮の量的増大とは全く異なることが繰り返して述べられた。そしてそこにこそ、意識が純粹持続である理由もあったのである。けれどもその同じことが、今度はノイロン連鎖の非連続性によって、生理学的に説明される。もっとも、その言葉でベルグソンの意味するものは余り明らかではない。けれども例えば生理学で云われる皆無律 all-or-none の如きものを当てはめて考えるなら、次のように云い表わすことができるであろう。「刺戟の強さがいやしく閾値以上であれば常に最大の反応を呈し、刺戟を強めても反応の大いさが変わらない」。¹⁶⁾ すなわち個々のノイロンは原則として刺戟に反応するかしないかの何れかであって、漸次興奮を増すことはない。だから幾個かのノイロンを含む筋や神経系全体の興奮量の変化も常に非連続的な段階をもち、しかもその段階の数は、そこに含まれている線維の数を越えることはないはずでなければならぬ。したがって、ベルグソンの云うように、刺戟の強弱に依らずと見える興奮の大小は、実はそれに関与する線維の数の多少にすぎないものとなる。

ベルグソンによれば、身体は物質界の中で他とは異質的な不確定帯 zone d'indétermination を構成する (MM. 36)。「それは世界の中に挿入された或る量の偶然性を、すなわち或る量の可能的行為を表わす」(EC. 262)。人間においてはこの不確定性の中心は脳にあるから、したがって脳は、受けとった多くの通信を「待せておいたり」「伝えたり」する中央電話交換局に喩えられる (MM. 26)。「有機体の一点から受けた電流を、任意の装置の方向へ仕向けてやるスイッ

14) 秋元波留夫「意識の神経機構」(『中枢神経系研究の方法論』p. 31, 45 etc.) 視床統合系 thalamic integrating system ということが云われている。

15) ベルグソンは、この言葉は用いてはいないが、

実質上、それと同じことを考えているのは、本文の次の引用文から明らかであろう。

ただし、その構造については、ベルグソンは何の考慮も払ってない。

16) 本川弘一「電気生理学」p. 17.

チ」なのである (ES, 9)。このようにして脳は「選択の器官 *organe de choix*」と呼ばれる (ES, 9)。しかしその言葉の意味がすぐれて生理学的であることは、以上によって明らかであろう。ベルグソンにとって脳は何よりも、物体の振動を選択的に受容し、それを多様な仕方では物体に返してやる運動の器官でなければならない。¹⁷⁾

だが一体ベルグソンは、求心神経系の損傷が表象に変化を来し、したがって表象の主体が脳であるように見えることをどう考えるのであろうか。脳が行為のための器官であるとすれば、そのことは否定されるのであろうか。だが、彼自身次のように述べている。「いわゆる感覚神経線維の一本が切れる度に、知覚はその一要素を失う」(MM. 43)。また「脳脊髄系のすべての求心神経を切断すれば」「私の知覚は全部消失する」(16)。ただしベルグソンの云う知覚については、充分の注意が必要である。彼の知覚の概念からすれば、これらの事実は何ら心身の平行を帰結するものではない。

ベルグソンによれば「物質は *images* の総体である」(MM. 7版序1)。我々は平生、対象が精神の中のみあるとか、また精神にとってのみ存在するとは思っていない。だがまたその反対に、対象は知覚されているのとは全く異って、色も固さも持たないものとも考えない。常識では例えばこの机は知覚されなくとも存在し、また我々の見る通りの色や形を自らの中に持つものとして存在する。「対象はそれ自身で存在し、他方我々が知覚する通りに絵のようなもの *pittoresque* としてそれ自身で存在する。それは *image* であるが、即自的 *en soi* に存在する *image* である」(MM. 2)。事物はそれ故、観念論の云う「表象」と実在論の云う「もの」との中間の *image* として (MM. 1)、あるいは「存在」と「現象」が区別される以前の物質であるところの *image* として存在すると云われる (MM. 2)。つまりベルグソンにおいては「物質は知覚されるがままに存在する」のであって (MM. 76)、したがって彼の立場は一種の素朴実在論とも云えるであろう。¹⁸⁾ しかし差し当って今は、彼の云う *image* が即自的な存在である点に注意しよう。もしそうなら、対象が *image* であるのは我々に表象されているからではなくて、それ自身すでに *image* だからと云わねばならない。事実ベルグソンは「*image* は知覚されなくとも存在し、表象 *représenter* されなくとも現在 *être présente* する」と述べている (MM. 32)。つまりベルグソンの認識論においては、表象 *représentation* は *image* に何もの

17) 前述のようにベルグソンは、シナプスの機構そのものについては考えていないので、選択の可能性 (= 非決定性、不確定性) は説明しえても、それなら何故、現実には或る特定の行為が多く選ばれるのかという点は、生体の *utilité* という以外、特に原理を考えてはいない。しかし、生理学では、シナプスは無限に可能であるはずなのに、事実上は比較的限定されていることの方が、むしろ説明するべき重要な問題となっているように思われる。したがって、ベルグソンの云う「選択」も、決定性の意味にもなりうるものであって、そこに *libre arbitre* を考えるかどうかは、また別の問題である。というよりも、ベルグソンの「自由」は、「時間」の介入によって始めて成り立つので、*libre arbitre*

でないことは『エッセ』の第三章で明らかであろう。そこで、少くも時間を無視して考える限り、ベルグソンの云う「選択」は、比喩的な表現にすぎない、という見解も成り立つことになろう。例えば Lacombe: *La psychologie bergsonienne* p.149 参照

18) Ruyer はその様に解している (“*La conscience et le corps.*” p.23)。たゞしベルグソンは、他の箇所では、次のように述べている。「観念論にとっては、外的対象は *images* であり、大脳もその一つである」(ES. 197)。しかしこれは実はベルグソン自身が『物質と記憶』で繰り返し述べていることなので、もしそうならベルグソンの立場は、観念論であることにもなるだろう。

も付け加えないのである。¹⁹⁾ 机の褐色は我々の知覚以前から机自身において褐色なのであり、また知覚によってその何かが変わるわけではない。机上のP点の image は、非延長的な表象が外界に投射 projeter されてP点にあるのではなく、「Pの image が形成され知覚されるのは、まさにPにおいてであって他の所ではない」(MM. 41)。ベルグソンにとっての知覚論の問題は、したがって表象と対象の一致・不一致ではない。すでにそれ自身で「可能的」「中性的」に存在する image が、いかにして我々の意識において他の images から浮き上って、一枚の切り抜き絵のような「現実的」image となるかが問題なのである (MM. 33)。そして脳という「身体」こそは、そのための原理として考え出されたものにほかならない。

一体ベルグソンによれば、知覚はもともと対象を無記的に写す純粋知ではない。なぜなら、写すということは字義通りには、事物そのものにおいて既になされていなければならない。かりに物質が原子から成るとすれば、各原子は無限に多くの他の原子の作用を受けとり、それを完全に表出しているはずである。ライプニッツのモナドはまさにそのようなものであって、各モナドは小宇宙として、内的には宇宙そのものと同じ構造を持つものであった。すなわち写すということは「権利上」は、全物質の作用が何ものも失われずに完全に受容されることであり、したがって映像も「透明」で「無限定 indéfini」でなければならない (MM. 36~8)。それが「事実上」は絵画的であるのは、身体がすでに自らの生命の効用 utilité にしたがって全物質の作用から選択を行うからである (7)。image に関して云うなら、「知覚は権利上は全体の image であるべきなのに、実際には我々に利害関係をもつ image に限られる」のである (MM. 38)。このような選択が神経系の非連続性・多様性に基くものであることは云うまでもないであろう。しかしともかくも、知覚は透明な光が鏡に遮ぎられて結んだ像のように、生体の非決定帯に対応して切りとられた image にしかすぎないことに注意すべきである。知覚されている image は、本来あったものの孤立化ないし現実化であって、それ以上のものではない。image の総体は物質と呼ばれたが、その同じ image が私の身体という特殊な image に関係せしめられたとき、つまり身体が物質の作用の通過を遮ぎり、それを自らの可能的行為へと転換したとき、その image は「物質の知覚」とされるのである (MM. 17)。すなわち知覚は、一方では我々の行為の躊躇であり (EC. 145)、また「起りかけている行為 action naissante」(MM. 71) ないし「可能的行為 action possible」(MM. 50) であり、他方では事物の運動の遅退そのものなのである。

このベルグソンの主張は、或は異様に思われるかも知れない。しかしこれは、彼の生理学的な立場からの当然の帰結でなければならない。今日でも全ての知覚は一定の運動価値 valeur motrice ないし運動的表情 physionomie motrice を持っていて、筋肉の緊張に何らかの影響を与えることは、或る種の患者において確かめられているところである。すなわち彼等においては、例えば赤を知覚するか青を知覚するかによって、腕をあげるという簡単な動作にさえ、種々の変化が見られるのである。これは、正常な人間においても存在している現象が彼等においては拡大されて現われるからだとするならば、一般に知覚は運動の随伴 accompagnement moteur を持ち、刺激は直ちに「起りかけている運動 mouvements naissants」を開始させる、と云っていいであろう。²⁰⁾ ベルグソンは、これと同じことをもっとラディカルに、すなわち、知覚が運

19) Sartre: L'Imagination p. 43.

la perception. pp. 242~3 による。

20) M. Merleau-Ponty: Phénoménologie de

動を伴うというよりは、知覚はそれ自身初発的運動そのものであるとして述べているのである。

このようにして、image の選択は脳によるとは云え、知覚においては我々は全く運動を介してのみ対象に係わるのであって、意識の内在性や非延長性を云うのは、少なくとも純粹な知覚 perception pure——記憶を捨象して考えられた知覚 (MM. 31)——においては意味をなさないことになる。

しかしそれにしても、知覚が我々自身のうちに在るように思われるのはなぜであろうか。それはベルグソンによれば、知覚を構成する全体から大脳内の過程だけを抽出し、そこに対象の表象が保存されていると考えるからにはほかならない。たとえば夢や幻覚においては、対象に対応しない心像が見られるであろう。このことが、知覚を内在的と考えさせる大きな要因である。けれども実は、そのときの image は知覚ではなくて記憶なのである。純粹知覚においては、対象とそれから発する振動と受容器および神経要素が、あくまでも不可分の全体をなしていなければならない (MM. 41)。

さらに我々の先入見では、対象との運動的係わりは常に触覚的に考えられがちである (EP. I. 95)。そして他の知覚においては、自らを外界から孤立したものと考え、また知覚も自らの内に自足すると断定する。たしかに突然視力を失ったとしても、我々は或る程度今迄と同じ運動を続行しうるであろう。外的刺戟に対するこの中立性 *indifférence* が、我々自身を外界から隔離された一つの内在と考えさせるもう一つの要因である。けれども身体の運動のこの比較的な恒常性は、何か他の知覚の代償によるのであって、実際は「脳の中には新しい配列が出来ている」(MM. 44)。外的には同一と見える運動も対応する印象の違いによって、内的には異なった刺戟伝達によって行われているのである。したがって対象との行為的係わりを、触覚にのみ限る理由はない。

またベルグソンによれば、知覚がしばしば感情 (*sentiment, affection*)²¹⁾ と混同されていることも考慮されなければならない。一般に感情はベルグソンにおいては、W. James にならって末梢感覚に分解される。²²⁾ 例えば筋肉的努力の感覚は「神経的な力の放射」の意識ではなく、「その結果の筋肉運動」の意識とされる (DI. 17)。右眼の外直筋が麻痺している患者が、その目を右方に向けようとして持つ努力感は、実は左眼の運動の知覚なのである。²²⁾ 注意などの精神的努力においても、我々の抱く努力感は、表象の動揺や不決断の感覚ではなくて、身体の不安 *inquiétude du corps* の感覚なのである (ES. 183)。「我々は我々の思惟を外的な動作に演じようとする傾向を持ち、そしてこの遂行される動作の意識が、一種の跳ね返りによって思惟それ自身に返って来る」(ES. 184)。もっと烈しい感情、すなわち情動 *émotion* についても同様に云われている (DI. 21)。しかしこれらのことはベルグソンにとっては同時に、感情や情動の対象が自己自身の身体であることを意味する。たとえば「苦痛」は破壊された身体の部分を恢復しようとする局所的 effort とされるが (MM. 56)、そして局所的であるという点にその努力の無力さがあるにもせよ、それは自己の身体を対象とした現実的作用 *action réelle* なのである (MM. 58)。感情は身体についての「内からの知」であり (MM. 11)、そこに感情の内在性

21) ここで感情というのは、例えば努力の感じ、容易さの感じという場合の「感じ」を指す。

22) ジェームズ 「努力の感じ」(世界大思想全

集15巻『ジェームズ論文集』p. 63) 本文の次の例も、James から引かれたものである。(同 p. 72)

がある。²³⁾ また現実的作用という点でも知覚と異なる。しかるに我々は両者の混同によって、感情の内在性を知覚に移し入れ、そして遂には知覚をも内在的と考えるのだとベルグソンは云う。

それなら知覚は何処にあるのであろうか。上述のようにベルグソンにとっては知覚は、私の身体に関係させられた物質であるところのその同じ image であった。とすれば知覚は「私の身体の外にあり」(MM. 58), 「対象それ自身の中で知覚され」(MM. 41), 「真に事物の一部をなす」(MM. 66~7) のでなければならぬ。触覚においては我々は対象に触れているから、対象の作用および我々の反作用(反応)は対象の中にも在るであろう。が他の知覚においても同様であって、たゞ我々の反作用が可能性に止まっているだけの違いなのである。

我々は今迄、知覚を特に純粹知覚として考察して来た。しかし我々の現実の読書や会話は、対象(文字や話)の詳細な知覚によって行われるのではなく、多くは記憶によって代用されている。その意味では、「知覚するとは思い出すこと se souvenir の機会にすぎない」と云える(MM. 68)。ところでこの記憶についてベルグソンは次のように述べている。「我々は権利上は物質を物質の中で知覚するのに、事実上は我々の中で知覚する」のは、「記憶が現在の中に過去をはめ込み、持続の多くの瞬間を唯一の直観に凝縮するからである」(MM. 76)。すなわち「感覚的諸性質の主観性」や「我々の認識の主観的側面」をなすものは、記憶だというのである(MM. 31)。そしてすでに、序において示唆しておいたようにベルグソンにおいては、この記憶こそが意識の真の内在性をなすものにほかならない。感情は既に知覚に比して内在的とされたが、その感情でさえ記憶に比しては外的なものに止まる。なぜなら、感情の対象が身体であるとすれば、知覚の場合と同じ論理によって、感情が在るのは身体その箇所ではなければならず、そして身体は、持続する根底的自我 moi fondamental から見れば、なお外的なものだからである(DI. 96)。その意味で感情は、知覚と記憶の中間に位置するのである。

もしそのように意識の主観的側面が記憶にあるとするなら、今迄考察された純粹知覚はその客体的側面であることになろう。そして感覚神経線維の一本切れる毎に失われるという知覚もまた、実は知覚の客体的側面にすぎないことになる。もちろん知覚の一側面が失われるならば、知覚そのものも完全ではありえず、我々の意識から消え去るであろう。けれども、だからと云って神経線維の一本一本が知覚それ自身に対応していることにはならない。

それならばベルグソンにおいて、知覚の主観性をなす記憶とはどのようなものであろうか。しかしその問題を考察する前に、ベルグソンの失語症論にふれる必要がある。それは一方では彼の知覚論を実証し、他方では純粹に考えられる限りでの記憶の展望を与えようとするものである。

3. 失 語 症 論

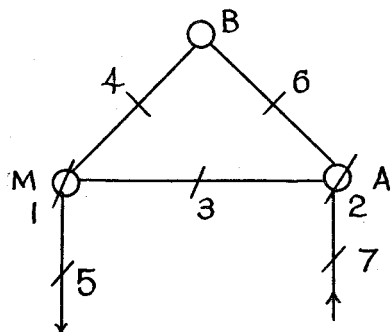
ベルグソンの失語症論の当面の目標は、平行論の「とっておき」の事実が果してその仮説と合致するかどうかを検討し(ES. 50)、さらに脳損傷が、意識ではなく根本的には身体の運動

23) 以上のことが、例えば次のように表現されれば余り異議を唱える人はいないであろう。

「情緒は一方では皮質性知覚や心像の形成に伴って起るが、また身体内部に生じた内環境の変

化を意識に反映して、この変化に対応する適応行動を誘発する上に主要な役割を演ずる。……」
秋元波留夫：上掲書 p.19-20.

に係わるものであることを示すにある。その場合、ベルグソンが絶えず念頭に置き、対決しなければならなかったのは、連合主義の失語症論である。それを今、普通に古典的図式として最もよく知られている Wernicke-Lichtheim の図式において見ておこう。



めると7通りある。

まず第1形式、すなわちMそれ自身が破壊した場合を考えると、B—MおよびA—Mの連合が不可能であることが図で知られるであろう。ということは第一に、概念中枢Bに貯えられている記憶心像が構音の記憶心像Mと結びつかないということ、すなわち思うことを云えないことを意味し、次に、聴覚心像Aと構音中枢Mが結びつかないということ、すなわち他人の言葉をその意味の理解(B)と無関係に反復する機能が失われたことを意味する。しかるにA—Bの連合には何の支障もないから、聴覚的印象によって呼び起された聴覚心像は概念中枢と結合し、したがって他人の言葉の理解は可能である。以下同様にして、計7つのタイプが区別されるのである。それを表示すると次のようになる。²⁴⁾ ⊖は機能喪失を表わし、⊕はそれが保持されていることを示す。

形式	損傷箇所	⊖	⊕	名 称
第 1	M	B—M (自発語) A—M (模倣語)	A—B (理 解)	皮質性運動失語 Broca型
第 2	A	A—B (理 解) A—M (模倣語)	B—M (自発語) 但し錯語	皮質性感覚失語 Wernicke型
第 3	A—M	A—M (模倣語)	A—B (理 解) B—M (自発語)	伝導性失語
第 4	B—M	B—M (自発語)	A—B (理 解) A—M (模倣語)	超皮質性運動失語
第 5	M→	B—M (自発語) A—M (模倣語)	A—B (理 解)	皮質下性運動失語
第 6	A—B	A—B (理 解)	B—M (自発語) A—M (模倣語)	超皮質性感覚失語
第 7	→A	A—B (理 解) A—M (模倣語)	B—M (自発語)	皮質下性感覚失語

Lichtheim は、失書や失読の現象をも説明するために、さらに視覚中枢および書字に必要な

²⁴⁾ Ombredane: L'Aphasie et l'elaboration de la pensée explicite, pp.96~99.

大橋博司:「失語, 失行, 失認」p.16.
井村恒郎:「失語症」pp.7~8 による。

な器官の中枢を加えたもう一つの図式を考えており、その二つの中枢を含むなら連合関係はもっと複雑になる。またベルグソンも指摘しているように (MM. 137)、概念中枢は具体的に何処と示しえない仮説的中枢であり、Wernicke も始めはそれを視一触の連合と考えたが、後には皮質全体を概念の場 *station conceptuelle* と考えるに至ったと云われている。²⁵⁾ 恐らくそれは概念中枢という考えそれ自身が連合主義とは相容れないからであろうが、しかし一般的には、以上のように種々の記憶心像を貯えた中枢を仮定し、大脳損傷に伴うその破壊ということから失語症の諸類型を説明しようとするものであった。

それに対してベルグソンは先ず、記憶に二つの形式を区別することから始める。一つは習慣としての記憶であり (MM. 84)、反復すること (787)、機械的であること (ES. 156) を特徴とする。この記憶は、過去を思い出すというよりは身体によって現に行うのであるから、過去は有機体の中に定着された機構 *mécanisms* として現在の中に吸収されている (MM. 167~8)。

(以下「習慣一記憶」と呼ぶ。) もう一つは、一定の日付けと場所とを持ち、決して繰り返されない唯一回限りの出来事についての記憶、すなわち表象する *imaginer* 記憶、もしくは表象 *représentation* としての記憶である (MM. 85~7)。ここでは過去は過去として思い出されるから、これこそが真の記憶 *mémoire vraie* と云われる (MM. 168)。(以下「表象一記憶」と呼ぶ。) そしてこのような区別の後ベルグソンは、脳損傷に伴う記憶の障害は、決して記憶心像そのものの喪失を意味するのではなく、単に「習慣一記憶」にのみ関するものであることを示し、したがって大脳が「表象一記憶」の産出ないし貯蔵の器官ではありえないことを論証しようとする。

上の図式からも察せられるような失語症の種々の症候のうち、ベルグソンが始めに注目するのは、Broca 型運動失語における残余語 *Wortrest* の現象である。すなわち、命令によっては不可能だが、時として不意に歌詞を誤らずに全部歌ったり、祈りの文句や数の系列、曜日、月の名前などを流暢に暗誦したりすることがあるという現象である (MM. 92)。ベルグソンによれば、これらの残余語は、発せられるのが常に不意であることや、また同じ言葉を意識的には二度と繰り返しえないことから見て、「言語の一種の反射作用」でなければならない (MM. 92)。しかしこの現象は実は我々の日常においても、例えばメロディなしでは容易に想起できない歌詞を、無意識的な歌唱としては簡単に思い出しうるというような場合に、しばしば経験されることなのである。つまり残余語は、我々の言語活動ないし言語の記憶が、そのかなり重要な部分において、習慣一記憶であること、またそれは往々にして意識的な想起とは拮抗的な関係にあることを示す。したがって残余語の現象だけからでも、失語症は単に記憶心像の喪失によっては説明しえないことが予想される。事実この種の患者が自発語は云えないとしても、他人の言語を理解しうる以上は、記憶は何らかの形で保持されていなければなるまい。

もし言語の記憶が、聴覚印象が大脳回転に沈積して出来た痕跡 *trace* ないし皺 *pli* であるとすれば (MM. 150, 88)、我々は同一の言葉に対して無数の記憶を持たなければならない。しかるに言語活動における言葉の記憶とは、個別的な言葉の記憶ではなくて、言葉の主題 *thème*²⁶⁾

25) Ombredane: op. cit. p. 100.

26) Ruyer: *Du vital au psychique*.

(“La valeur philosophique de la psychologie” p. 18)

の記憶である。例えば「山」という言葉の記憶を表象—記憶として考えるなら、それを発音した人やその時の状況に応じて、我々は無数の記憶を持っているはずであろう。しかしその言葉が云えるかどうかの問題となるときには、それがともかくも「ヤマ」という一つの音(=主題)を表わす習慣記憶であることが重要なのである。また言葉は、句 phrase を単位としており、同じ単語でも違った句の中では意味を変えるであろう (MM. 138)。そのことも大脳回転における聴覚心像の刻印とは矛盾する。何れにしても、連合主義の images や中枢は、すでに出来上がったもの choses toutes faites であるのに対して、我々の思惟 pensée は動的な運動なのである (MM. 139)。このことをベルグソンは、再認 reconnaissance の障害である失認症 agnosie において一層詳細に考察する。

失認症は一般に、それが視覚に関するか聴覚に関するかによって精神盲 cécité psychique および精神聾 surdit  psychique に分けられ、更に障害が言語にのみ限られた場合には、それぞれ言語盲 cécité verbale および言語聾 surdit  verbale と呼ばれる (MM. 118)。いわゆる Wernicke 型の感覚性失語症は、この後の二つに相当するものであろう。

ベルグソンによれば、失認症の症候は臨床上から一応二種に分類される。すなわち「視覚的ないし聴覚的印象はまだ想起されるが、しかしもはや対応する知覚に適用されえない」場合と、「記憶の想起そのものが阻止されている」ように見える場合である (MM. 119)。けれどもこの区別はベルグソンにとっては、何ら失認の本質に基くものではなく、単に臨床上の区別にすぎないものであった。

再認は連合主義においては知覚と記憶の連合 association として説明され、さらに連合の要因としては、それら二つの表象ないし付帯状況の類似性の知覚があげられるであろう (MM. 97. ES. 142)。けれどもベルグソンによれば、類似とか親近性とかはそれ自身一つの関係であり、したがってそこには既に連合が完成していなければならない。だからそれは連合の原因ではなくて結果なのである。のみならずもっと根本的には、知覚と記憶の連合という仮定は、次のような諸事実と矛盾する。すなわち我々は時として、現在の知覚に対応する記憶を想起しえないのに、しかも「見たことがある déjà vu」という感じを持つことがある。この場合には再認は過去の心像に先んじて行われ、記憶の出現はその後になっている (MM. 98)。したがってこの時の再認を、表象—記憶と知覚の連合とみなすわけにはいかない。またベルグソンは、或る精神盲患者が、目をつぶって自分の住む町の各所を思い出さう(=表象—記憶を把持している)のに、現実にその場に行っては(=知覚しても)何一つ再認できなかったという報告を引いている。²⁷⁾ もしそうとすれば、或る知覚が再認されるためには、それに類似した視覚的記憶の把持だけでは充分でないということになる。他方その反対に、視覚的記憶心像が殆んど全蝕しているにも拘らず、視覚の再認は全く消失してはいないという場合もあるという。²⁸⁾ そこで再認について次のように云わざるをえない。「すべての再認は常に古い心像の介入を含むとは限らず、また知覚をそれと同一視しえない場合でも古い心像を思い起さう」(MM. 100)。知覚と

27) 28) このうち、前者は Wilbrandt から、後者は Charcot の研究として Bernard が報告したものから引かれている。ところで、これらは一般に Charcot—Wilbrandt 症候群と云われているものに含まれるのではないかとも思わ

れるが、もしそうなら、両者は実は何れも同一の視覚的記憶障害に属するものであって、ベルグソンの云うように正反対な症候を示すかどうかには疑いがある。しかし、詳細は不明。

(大橋：上掲書 p. 278)

記憶のこのような解離は、何によって説明されるのであろうか。

ベルグソンはここでは、患者たちの模写に多く見られる『「遂点的描法 *dessin par points*」や、また「見当識の喪失」などを重視する (MM. 105~6)。例えば我々は文字を読みまた写す場合、その一点一点に亘って点検するわけではなくて、文字を構成する運動の大筋の方向によって一気にその文字を知るであろう。だからこそ、細部においては全く異っている文字も、皆同一の文字と見られるのである。物体や図形の模写においても、我々は大略の輪郭さえ捉えるならば、厳密には対象と似もつかない模写で充分満足する。すなわち知覚からは大筋の方向を得るだけで、後は手の習慣的運動に任せてしまうのが我々の最も普通の模写なのである。このような対象構成の運動の大筋は、「運動図式 *schème moteur*」ないし「動的図式 *schème dynamique*」と呼ばれる (MM. 121 ES. 161)。したがって、精神盲患者が予め打たれてある点を伝ってでなければ模写ができず、また遂点的でない場合でもやたらに断片的な部分を描いて全体的にまとめ上げられないのは、つまり対象を連続的な運動によって一気に描くことができないのは、文字や図形を運動図式として捉えられないからと云えるであろう。同様に、盲人なら直ぐに方向を弁別できるようになるのに、精神盲患者は数ヶ月の訓練によっても自分の室内の勝手さえ分らないのは、方向の見当付けという運動の図式的把握が不可能であることを意味する。²⁹⁾

しかしこのことは、単に模写や方向の弁別など再認が特に身体の運動に係わるように見える場合にのみ当てはまるのではない。我々は普通、例えば不明瞭にしか見えないものを見分けようと精神を集中するとき、再認は意識的で、また意識にのみ係わると思うであろうが、しかしベルグソンによれば、動作による自動的再認 *reconnaissance automatique* と注意的再認 *reconnaissance attentive* とは本質的に何の差異も持たない (MM. 107)。ベルグソンにとって精神は、いわば一定量の光を時には四方に拡散し、時にはそれを一点に集中するというものではなく、したがって注意も、知覚の強度を高めることによってその内容を鮮明にする作用なのではない。むしろこの場合、知覚を強め豊かにするのは記憶なのである。つまり注意とは、

29) 数多くの脳損傷患者を扱った Goldstein は、次のような報告をしている。即ち患者たちに、白紙の上に文字を書くように命ずると、彼等は紙の上縁に平行に、しかも、字を非常につめて書くのが普通である。強いて真中に書くように命ずると、拒んで興奮するようになる。しかし線をひいて、その上に書かせると、直ちに書くことができる。また、線の上に書かれてない文字は読むこともできない者もある。線なしに、黒板に文字を書くと、彼等は、チョークをとって下に線をひき、それから読む、というのである。このような空白の回避は、彼等が常に具体的なもの (*Gefülltes*) に頼らずには、何もしないこと、すなわち抽象的態度の欠如を意味

すると Goldstein は云っている。それはまた彼の云う範時的態度 (*Kategoriales Verhalten*) の欠如とも考えられるであろう。(Vgl. *Der Aufbau des Organismus*, S. 31. また西谷訳「人間、その精神病理学的考察」pp. 111~112). この考えは、ベルグソンに極めて近いものに思われる。もっとも Merleau-Ponty なども云うように Goldstein の立場を主知主義とするならば、ベルグソンの立場は、反って、Merleau-Ponty の実存論的な立場に通ずるとも云えよう。なぜなら、ベルグソンの図式的態度は身体的なものだからである。(cf. Merleau-Ponty: *Phénoménologie de la perception* p. 93 註2. p. 211)

出来るだけ多くの記憶を知覚に反射 *réflexion* させることなのである (MM. 112)。³⁰⁾ とすればここでも再び、自動的再認と同じ問題、すなわち知覚と記憶の結合の問題に直面することになる。そしてもし知覚と記憶の連合主義が維持できないとすれば、両者の媒介としてやはり運動図式を考えざるをえないのである。

ベルグソンによれば、記憶心像が明らかには表象されないのを見たことがあると思うのは、対象の図式的把握と共に身体の或る習慣的運動が開始されようとするからだという。我々の扱いたれた対象においては、知覚はつねに習慣—記憶に最初の衝撃を与えるにすぎないのであるが、それが実は再認の普遍的構造なのである。「再認の感じが与えられるには運動傾向だけですでに充分だ」とベルグソンは云っている (MM. 103)。この運動傾向に助けられて過去の記憶心像が想起されかかったとき我々は「見たことがある」と感ずるのである。不明瞭なものがだんだん分明になって来るのも、同様の現象に他ならない。だが、身体の運動傾向は、如何にしてそういう働きを持つのであろうか。

(1)第一の理由は、すでに述べたように、ベルグソンにおいては知覚が、起りかかっている運動であるということにある。その運動は始めは末分化であろう。だが知覚が反復されるにつれて秩序が出来、或る運動への大略の傾向が生ずるのであろう。それが運動図式にほかならない。すなわち一方では、知覚は運動図式に発展する必然性を持っている。

(2)しかるに他方、記憶が意識されるのは、身体の運動に与かる限りにおいてだ、という所に第二の理由がある。すなわちベルグソンは、記憶心像は無意識の層において把持されると考える (MM. 156)。恐らく先にあげた運動性失語の例が、そのことの有力な証言となろう。我々は想起できないからと云って記憶そのものを失っているわけではない。忘れたように見えるのは、或いは忘れるということそのことは、把持された記憶を意識できないことを意味するにすぎない。我々の現実の記憶は極めて少数であるように見えるが、しかし必要に応じて色々の記憶が想起される場所を見れば、実際には無数の記憶を把持していると考えべきであろう。しかしそれらの多くは、結局のところ、生体としての我々に今は無用であるという点に、忘却ないし無意識があるのである。ベルグソンにとって現在とは「働くもの *l'agissant*」であり、過去とは「無力なもの *l'impuissant*」である (MM. 156, 152)。逆に云えば、忘却のうちに把持されている記憶が意識化されるのは、何らかの身体的運動に与かり働くものとなることによってである。或る記憶を過去の或る一点に付置付けることさえも、過去という袋の中にそれを探しに行くことではないとベルグソンは云う (MM. 191)。或る記憶を過去の出来事として表象するとは云ってもその表象は現在にある限り、それは感覚—運動系 *systèmes sensori-moteurs* においてのみ可能でなければならない (MM. 169)。「過去は本質的に潜勢的 *virtuel* であるから、それが我々によって過去として把握されうるのは、過去が闇から白昼に出て現在の *image* に開花する運動に従い又それをとり入れることによってのみである」(MM. 150)。

要するに再認には二つの過程が含まれている。一は知覚→運動図式の過程であり、他は運動

30) 我々は、全く聞いたことのない言語は、いかに注意しても聞きとりえないことを考えれば、このことは納得できるであろう。例えば、突然「こるり」という言葉を聞かされたとする。それが日本語の鳥の名であり「小るり」を意味することを知らないなら、どんなに注意しても、「コルイ」「コロイ」「コウリ」などと定まると

ころがないであろう。日本語とは違った音韻を含む未知の言語では、なおさらそうである。すなわち、記憶を手がかりにできない場合には、注意のしようがないのである。(福田恒存:「私の国語教室」新潮文庫版 p.73 による。)

図式←「習慣—記憶」←「表象—記憶」の過程である。すなわち知覚は反復されることによって先ず図式的運動に秩序付けられ、と同時にそれを潜在的に構成する種々の習慣的運動の現実化が用意されるであろう。しかしそれは反面「表象—記憶」にとっても、その身体化・運動化への目標 *point de repère* ないし *cadre* が与えられたことを意味する (ES. 170)。したがって記憶は、運動図式が与えられさえするならば、もはやいちいち知覚に頼ることなしに一気に、対象の再認へと実現されるに至るのである。

ところで、ベルグソンにとっては大脳は運動の器官であったから、その損傷も運動の障害を結果するはずでなければならぬが、それが厳密には運動図式の障害を意味することは以上で明らかであろう。大脳に損傷を受けた場合には、知覚と共に起りかかった運動はもはや大筋の運動に展開されない。したがって記憶は挿入さるべき枠を失い、知覚と結びつかぬままに放置されることになる。それが上述の失認症や又 Wernicke 型の感覚失語症にほかならない。例えば他人の言語を聞いてもその聴覚印象が運動図式に発展せず、したがって音が適当な大略の分節に分けられない。記憶は把持されいながら聴覚と合流できずに無効のままに止っている。このことが言語の理解不能の原因なのである。この種の患者がしばしば発する錯語も、同様の事情を示すものであろう。自分の言葉といえども、その理解の仕方は他人の言語の場合と同様であろうから、自分の云うことも理解できないはずであり、そのことが錯語を云わしめるのである。もっとも、それが自発語であるというその点は、言語の反射作用とする以外にはないであろう。

何れにもせよ、ほぼ以上のようにして、大脳の損傷は運動図式の障害を来すにすぎず、したがって大脳は運動図式に対応するだけで決して記憶心像そのものに対応するのではないというのが、ベルグソンの失語症論の主張である (cf. EP. I. 150)。³¹⁾

なお、感覚性失語症のうち健忘およびその恢復が進行性であるもの、すなわち進行性失語症 *aphasie progressive* は (ES. 53)、少なくとも連合主義の批判という点ではベルグソンに極めて有利な事実を提供するであろう。ベルグソンによれば、この失語症に特徴的なのは、談話における「迂説法 *périphrase*」である。すなわち患者は適当な言葉 (名詞) が思い出せないのので、他の動詞や形容詞によって代用させようとする。いわば動詞が最も病気に対して抵抗力を持ち、名詞が最も弱い。したがって健忘が進行性である場合には、あたかも病気が文法を知っている

31) この点については、新ジャクソニズムの J. Delay の報告が、極めて興味深い。彼の患者は右頭頂部にピストルの弾丸を受けて以来、目をつぶっては、左手で何ものも再認できなくなった。しかし触覚そのものには異常がない。例えば鉛筆を示すと、堅い、スベスベしている、円筒状だ、など多くの印象を云う。けれども、それが鉛筆であること、即ちそのものの属している種が再認できないので、恰も左手だけが記憶を失ったかのようなのである (*amnésie tactile unilatérale*)。けれども、記憶そのものを失っていないことは、十分に時間を与えると、躊躇しながらではあるが正しい判断を下すことによって分る。躊躇しながらというのは、触覚的印象

象から推論しているからであるが、実は、その点にこそ異常性がある、と Delay は云う。すなわち、正常な再認は、対象の詳細な分析や、その総合によるのではなくて、唯一つの指標 (*indice*) から、殆んど直観的になされる。つまり、我々の再認は、知覚以前に与えられている或る図式的態度によってなされているのでありこの患者においては、それが失われているのだ。というのである。(Delay: *Les dissolutions de la mémoire*, pp. 45~47. *Les maladies de la mémoire* pp. 31~34). この図式的態度は、まさにベルグソンの云う運動図式にほかならない。

かのように、先ず固有名詞から始まって普通名詞、形容詞、動詞へと健忘が及んでいくという (MM. 132) (=ベルグソンによって Ribot の法則と呼ばれている (7))。現代においても、失語症の全体論的もしくは主知主義的立場に立つ人々は、何らかの形で進行性失語症を拠点とし、また紆説法を重視している。³²⁾ ベルグソンにとっても、これが「真の失語症」と呼ばれるまでに重んじられたのは想像に難くない (MM. 133)。

ところでこの場合、皮質の細胞がいつも同一の順序で犯されるとは考えられないから、ここでも大脳回転に貯えられた痕跡の如きものとしての記憶心像の喪失は問題とならないであろう。ベルグソンによれば実は言葉が「動作を表出し」、「動作に写される *mimable*」ということが重要なのである (ES. 54)。紆説法に見られるように動詞が病気に対して最も抵抗力を持つのは、それが身体によって演じられうる *jouable par corps* から、すなわち「(その語句に) 対応する動作を考え、そしてその態度が、語句の出て来た運動の一般的方向を規定する」からとされる (MM. 134)。抵抗の度合は身体的努力を用いて恢復しうる度合に依ずるといわけなのである。

このようにしてベルグソンは、大脳回転の特定部位と記憶心像の間に安易に1対1の対応を想定しようとする平行論を批判する。大脳は既に運動の器官と云われたが、正しくは運動図式の器官である。したがって脳の内部に入り込んであらゆる分子運動を観察したとしても、「図取りされた *esquissée* あるいは準備的 *préparés* 運動」が見られるにすぎないであろう (MM. 6)。大脳は知覚と記憶の仲介者であって、それ自身が記憶を貯えているのではない。知覚において起りかかっている運動を図式的運動に図取りし、そのことによって「考える以前」の身体的再認に一つの枠を与るにすぎない (MM. 103)°。それが過去の記憶心像の想起を容易ならしめ、そこに意識的な「考える」再認が起るのであるが、しかし大脳は記憶を保存するどころか、無数の記憶の中から生体の効用に依ずるものだけを運動図式という篩にかけて選び出し、それを現在の中に組み入れるところの、記憶の現実化 *actualisation* ないし具体化 *matérialisation* の器官なのである (ES. 52, MM. 169)。保存というよりは想起 *rappel* の器官と云うべきであろう。だが現実化されない他の大部分の記憶から見れば、それらは大脳によって反って無意識の暗闇に閉じこめられるとも考えられるから (EC. 5)、むしろ忘却 *oubli* の器官とも云えるのである。³³⁾ 何れにもせよ大脳は、まさに無意識な記憶と身体の運動との接点に位して両者の結合を仲介する。したがって再び失語症について云うなら、「いわゆる脳損傷による記憶の崩壊とは記憶を現実化していく連続的進行の中断にすぎない」(MM. 140)。あるいはまた「精神の事物への交叉 *insertion*」ないし「現実への滲透」の障害なのである (ES. 48, 126)。

32) cf. Goldstein: 西谷訳, 上掲書, p. 71 以下
 ここでも、語そのものが失われているのではなく、物の名前としてそれを使用できないのであり、そして、物の名前を云うということは、抽象的態度を必要とするが、それが、不可能なので、語健忘に陥るのだと云われている。また語を象徴として使用できないのだとも云っている。例えば、雨傘を示されて「雨のために持たなければならぬ」とか「家には雨傘が三本ある」と答えたりする。この後の場合には、正しい語が用いられているので、再び「これは何で

すか」と問うても、もはやその同じ語を繰り返しえない、という。これは Goldstein によればコップで水を飲むことはできるが、空のコップで水を飲むまねはできないとか、また釘を金槌で打ち込むことはできても、釘なしでは、金槌を打つ真似ができない、という様な現象と一連のものであって、何れも、抽象的態度の喪失とされるのである。たゞし、Goldstein は「名詞と動詞に著しい欠陥がある」と述べている。(p. 71) その点ではベルグソンと食い違いがある
 33) Chevalier: Bergson p. 181.

しかもこのことは失語症にのみ限られるのではなく、すべての精神的疾患の本質でもある。ベルグソンによれば、病気 *maladie* とは本来、何か新しいものを創造してそれを我々の心的生活に付け加えるものではない (ES. 125)。新しく積極的に見えるものも実は欠陥 *déficit* なのであり、すでに在ったものが拮抗的機構 *mécanismes antagonistes* の消失によって改めて出現したものにすぎない (ES. 126)。³⁴⁾ そして失われるものと云えば、第一に外界との接触である。狂人や被害妄想患者が不条理を云うのは、その推論が論理の規則を外れるからではなく、むしろ論理の過剰、あるいは論理の自動作用による (ES. 148, 168 MM. 91~2)。彼らの間違いは推論が下手だということではなくて、夢みる人のように現実の傍らで *à côté de la réalité*, また現実の外で *en dehors de la réalité* 推論することなのである (ES. 48)。何れも生活への注意 *attention à la vie* の喪失、ないし意識の *élan* の弛緩を意味する。

この点は、ベルグソンの失語症論のもう一つの重要な特質として注意すべきであろう。今迄述べて来たように、ベルグソンの第一の特徴は局在論の批判にある。しかし一般に局在論の否定は全体論を意味し、全体論はまた往々にして主知主義となる場合が多い。すなわち失語症を知能 *intelligence* ないし悟性 *entendement* の障害とみなすのである。しかもその場合注意すべきことは、悟性の障害は、言語の面においては内言語 *langage intérieur* の障害を考えられていることである。³⁵⁾ しかしベルグソンにおいては、悟性の障害を考える余地のないことは、上で明らかであろう。もし強いてそのような概念を用いるならば、失われているのは、知性ではなく本能 *instinct* なのである。(もっともこの場合、本能とは現実との共感 *sympathie* の能力を意味する (EC. 177))。仮りに、病気とは欠如に過ぎないというベルグソンの考えを、Jackson の意味での退行 *dissolution* と解しようとすれば、³⁶⁾ 精神の疾患において現われて来るものは原始的な思惟だということになるが、しかしその原始的な思惟 *mentalité primitive* をベルグソンは決して非論理的 *illogique* と前論理的 *prélogique* とも云っていない (MR. 151)。そこにあるのは論理の違いであって、論理の存否ではないのである。このようなベルグソンが、失語症論で主知主義をとるということはありえないであろう。したがって彼はまた内言語の障害という考えも否定する。ベルグソンによれば、そもそも「聞きとった言語を全的に内で反復する」という仮定は、「運動性失語症が必ずしも言語を惹起するものではない」という事実と矛盾する (MM. 128)。「云えない」のに「分りうる」とするならば、理解には、たとい内的にはあれ、言葉そのものを反復する必要はないであろう。事實はむしろ、理解するためには、その言葉を他の言葉と区別できるほどの大略の運動図式を捉えるだけで充分であるのに対して、自ら話すためには、図式の中に暗に含まれている運動の細部が全く現勢的に知得されている必要がある、ということなのである。

以上のようなベルグソンの失語症論が、当時の余りに楽観的な失語症論に対する極めて鋭い批判であったことは疑いないところであろう。そしてその点に、彼が失語症の「偶像破壊

34) Jacksonism との類似が見られる。何れも、進化論の影響であろう。

35) P. Marie や Ch. Foix, またもっと最近では Goldstein などがそうであるように見える。(Ombredane : op. cit. pp. 142-5 p. 161. pp.

250-5; また 井村恒郎: 上掲書. p. 9 による.)

36) Jackson においては、*dissolution* は *reversal of evolution* を意味する。(“Evolution and dissolution of the nervous system.” Selected Writings vol. II. p. 45).

者」³⁷⁾の一人たりえた理由もある。もっとも彼の批判を、逆に積極的な一つの説としてみるなら、それが今日でもそのまま認められるかどうかはともかくとしても、彼の立場それ自身の中においてさえ、矛盾を免れない点や、また疑わしい点もなくはない。

その一つに、例えば運動性失語症と感覚性失語症の関係があるであろう。確かにベルグソンの云うように、運動性失語症は感覚性失語症を惹き起さないであろう。理解には図式の把握で足りるが、自分で話すには完全に習慣化された運動が必要なのである。とすれば、(1) 運動性失語症においては、理解は可能のだから、運動図式は完全であって、障害は習慣運動に在ることになり、他方 (2) 感覚性失語症においては、習慣的運動は比較的完全でありながら（なぜなら自発語はとにかく可能なのだから）運動図式が欠けている（理解は不能だから）ことになろう。しかしベルグソンにおいては、大脳は云わば運動図式の中核でなければならなかったから、その同じ大脳の損傷が、このような二様の障害を結果するというのは矛盾でなければならぬ。しかも (1) の仮定においても依然としてペラドクスが残ることは、記憶心像の喪失を仮定する場合と少しも変わらない。なぜなら、習慣運動の障害は談話喪失の説明には好都合ではあっても、残余語の存在とは矛盾するからである。

同様のことは、上述の Lichtheim の図式の第四・第六形式に見られる「模倣語 *écholalie*」に対するベルグソンの説明にも云えるであろう。すなわち、模倣語は聴覚印象が分節運動（構音）へと発展しようとする傾向（＝運動図式）の現われた、とベルグソンは云う（MM. 124～6）。たしかに他人の言語の反復は完全な自動運動でも又完全な意志的運動でもなく、他方、運動図式もまた云わば半自動的な作用であるから、その点で両者を対応させることは可能であろう。しかし第四形式においては他人の言語の理解が可能であるのに、第六形式においては不可能である以上、この二つの失語症は運動図式は対して互いに逆の関係になければならないのである。³⁸⁾

またベルグソンにとって極めて有利であったはずの進行性失語症においても、「身体によって演じうる」という概念の意味は、あまり明確とは云えないであろう。ベルグソンの云う Ribot の法則は、一般に言葉の「感情価 *chargé affectif, potentiel affectif*」によって変容すると云われており、³⁹⁾ もしそうならば、ここで問題となる行為は身体の自動的な反射運動であろうかとも思われる。そして Ribot 自身においては、単にベルグソンの云う文法的秩序ばかりではなく、健忘が最も近い過去から漸次遠い過去に及ぶという前行性健忘 *amnésie antérograde* が問題であったらしいことを考えるならば、⁴⁰⁾ 恐らくその推定は間違っていないであろう。最も遠い過去ほど我々には習慣的・自動的になっているのであるから。しかしそのことは果してベルグソンの云うように、動詞が最も身体によって演じうるということをまで意味するであろうか。またベルグソンの触れなかった品詞、例えば前置詞・接続詞（日本語では助詞）など文

37) これは H. Head によって P. Marie に与えられた名称であるという。しかしベルグソンの「物質と記憶」は、Marie の「失語症論の改訂」に先立つこと、ほぼ10年である。
(Ombredane: op. cit. p. 138)

38) また先の註において、ベルグソンの運動図式の仮定を支持する有力な症例として、右頭頂部の損傷によって左手の触覚失認に陥った Delay の患者をあげておいたが、しかし厳密には、この場合、左手の再認を支配している運動図式は

少なくとも右半球に局在していなければならず、そのことをベルグソンの立場で説明しうるかどうかは問題であろう。というよりも、ベルグソンは運動図式を見出したことで満足し、それ以上論を進めていないため、それが大脳の全体に係わるのか、あるいは局在するのか、など多くの曖昧な点がある。

39) Delay: *Les dissolutions de la mémoire.* p. 94.

40) Delay: *ibid.* pp. 89～91.

の形態部に属する言葉は障害を受け難いと云われるが、⁴¹⁾ この場合には「対応する動作」という概念は殆んど意味を失うのではあるまいか。したがって、言葉が習慣的・自動的であることと *jouable par le corps* ということとは必ずしも一致しないように思われる。さらにまた、それと全く反対の現象、すなわち「失文法 *agrammatisme*」においては、失われるのは反ってそれら形態部の言葉であって、冠詞や接続詞・語尾変化などが簡略化された電文体の言葉が語られるとすれば、⁴²⁾ ベルグソンの考えがそこでどう適用されるべきかは、明らかに一つの問題となるであろう。

このようにベルグソンの失語症論には若干の問題があるであろう。それにも拘らずベルグソンは、我々が通常記憶と呼んでいるものには、記憶の把持とその想起という二つの過程が区別されねばならぬこと、そして想起には身体による想起という相のあること、すなわち考える以前に既に身体によって再認が行われ、それが過去の心像を準備するという過程のあること、したがって失語症は必ずしも記憶心像そのものの喪失を意味するのではないことは充分示しえたと云っていいであろう。ベルグソンにとって、記憶は無意識の層に貯えられ、それが身体の運動として物質化される時に大脳の仲介を必要とするにすぎない。つまり、我々の意識は本来、過去の無数の記憶の豊かさを実質とするであろう。しかし我々が現実の物質界において「夢みる人」とならないためには、その記憶に或る制限を加える必要がある。その制限の枠が大脳なのである。したがって我々が現実に生きる限り大脳と我々の具体的意識とは無関係ではない。しかしそれはあたかも、現在の一点とそれに接しようとする無限の過去との間の対応関係、すなわち部分的対応関係にすぎない。これがベルグソンの考える新しい心身関係にほかならない。

だがベルグソンのこのような主張が充分説得的であるためには、記憶は一体どこに貯えられるのか、またその場合の記憶とはいかなるものか、が明らかにされねばならないであろう。実はそこにベルグソン独自の記憶論が展開されることになる。(未完)

41) 井村恒郎：上掲書 p.25.

42) 同書 p.27.